

発行所(郵便番号100)
東京都千代田区丸の内2-4-1
丸の内ビルディング781号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel (212) 4007・1447
編集責任者 岡沢憲夫
印刷所 関東図書株式会社
定価200円(年間購読料参千円)
1990年12月25日発行
第22巻第12号
(毎月1回25日発行)
昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol.22 No.12

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi-Bldg., No.781. Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan.

90年代の政治環境

—「スウェーデン・モデル」に地殻変動の兆し—

Sweden: 90s

Harder Political Environment

常務理事 早稲田大学教授 岡沢憲夫

Managing-Director, Prof. Norio Okazawa

詳細な調査と慎重な審議を重ねながら、合意形成領域を拡大していく、コンセンサス・ポリティクスと称されるスウェーデン型政治技法である。だが、90年代の政策課題が伝統的な政治枠組に地殻変動を引き起こすかもしれない。EC加盟問題や原発廃棄問題、税制改革問題、酸性雨・温暖化問題など環境政策も解決を待っている。そして、肥大化したパブリック・セクターと経済活性化の適性臨界点という伝統的な問題もある。ブロック政治が従来通りの不平吸収力を発揮できないと、どれもが世論市場を分裂させかねない。

変動の兆しは政治的関心の変質と低下である。日常生活課題への関心は増大しているが、全国政治のトータルなイメージは描き難くなったのであろうか、政治参加は低下の傾向にある。スウェーデン型デモクラシーでは、民主主義拡大はそのまま分権化でもある。これからも分権化は一層進むであろう。児童手当、医療、学校教育、高齢者介護、などの行政事務は今後ますますコミュニケーション・レベルに再配分されることになろう。

ストックホルム大学のO・ルイン教授は、分権化の進展の中でふたつの問題点を予測できると既に指摘していた(R & D No.40, 15 december 1989)。分権化はそのまま中央の国家権力の弱体化、つまり国家権力の権限と機能の弱体化を意味する。まず、コミュニケーション間格差が発生・拡大する危険性がある。その結果、コミュニケーション間格差を是

正・調整する必要が増大し、集権化待望論に繋がっていく危険性がある。コミュニケーション間格差の調整をはかりながら分権化を促進するという作業は、絶妙のバランス感覚を要求する。ゲームに参加するプレイヤーが多くなれば、また、それが特定課題の解決に執着する単一争点主義政党であれば、それだけ合意形成は困難になる。議会内には既に6つの政党が存在する。環境党・緑と左党(前・左共産党)が議席確保に成功すれば、7番目の政党が議会に進出する可能性もある。キリスト教民主同盟Kdsである。世論調査の動向を分析すると分極化の波に乗って4%条項を突破する可能性も否定できない。経済停滞の進化は、不満噴出を促進・加速するので、異議申し立て政党が勢いをつける可能性がある。そして、小規模の抵抗政党が増えれば、それだけ合意形成が難しくなってしまう。ところがその一方で、冒頭に述べた重要政策課題が解決を待っている。広範な合意形成を必要とする。来年度の総選挙は90年代政治の行方を占う重要な手掛かりとなろう。

目次

90年代の政治環境	岡沢憲夫	1
スウェーデンの食品流通	内藤英憲	2
百年前の日本(ガデリウス百年史より抜粋)		
	長谷川篤志	4
平成2年度研究月報目次一覧		

スウェーデンの食品流通

The food distributive trade in sweden

顧問 日本大学教授 内藤 英憲
Prof. of Nihon Univ. Hidenori Naito

1. 流通合理化の実態

スウェーデンの食品流通では、その組織化が進行しており、消費生活協同組合連合会KF、バイイング・グループICA、ボランティア・チェーンVivo-Favörおよび大資本のSavaの4大組織が大勢を占める。さらに、これらの各種組織が個々に卸売機能を持っているため、わが国のような独立した卸売業者、あるいは問屋という業種がほとんど存在しない。それでスウェーデンにおいては、食品の流通経路は上記主要流通組織による4タイプのみという極めて単純なものとなっている。

生産から消費にいたる全プロセスを見ると、流通の各段階において主要組織による合理化、統合、組織化が進んでおり、食品生産、食品加工、食品卸・小売の各段階におけるその実態を概括すれば以下のようなものである。

1) 食品生産段階

食品生産段階で主要な地位を占める組織は、わが国と同様にスウェーデン農業協同組合連合会LRF (Lantbrukarnas Riksförbund)である。LRFは、600ある全国の単位農協のほぼ半数を傘下におく。わが国との大きな相違は、各単位農協がごく少ない種類の生産物を専門に生産、出荷する傾向が強くなり、15ある主要品目群別に連合会が組織されている。単位農協という意味ではその組織率は低いような印象があるが、LRFは単位農協の連合会を統括する組織であると同時に、契約栽培業者を含む国内の全農業従事者11万人のうちの10万人が加盟する農業者労働組合の中央組織でもあるので、LRFの組織率は90%を上回っている。

これら農業従事者は、主として所属する単位農協を経由して、生産物をLRFに販売しており、LRFの扱いは実に全体の85%を占め、これに対し、LRF非加盟の約300の未組織単位農協は、わずかに5ないし10%のシェアを占めるに過ぎない。

2) 食品加工段階

食品加工段階においては、LRFとKF、一般の企業の3グループが主要な生産主体を成している。スウェーデンにおける協同組合の勢力は西欧

の中でもとくに強く、LRFとKFの双方ともが、食品をはじめとする多くの加工設備を独自に保有している。食品加工段階では、市場価格ベースで、LRFは全体の48.5%と最も大きなシェアを有しており、次いで、組織化されていない一般の企業が39.4%、KFが12.1%と続いている。食品加工段階でのLRFの隆盛は食品卸・小売り業段階と同様KFの不振によるところが大きく、食品流通全体の均衡を崩す要因となっている。

3) 食品卸・小売段階

食品卸・小売段階では、前述のようにICA、KF、Vivo-FavörおよびSavaが主要な流通主体であるが、小売販売額をベースとしたそれぞれのシェアは、33%、20%、11.5%および5.5%になる。

2. 流通合理化の影響—小売店舗総数の減少

流通各段階での組織化が進行する過程において、スウェーデンでは、とくに小売段階において、1960年代に店舗数の減少が生じた。具体的には、小売店舗総数は1963年の71,000から1970年には49,000と激減している。業種別には、食品および食品以外の日用品を販売する店舗の減少が著しく、食品小売業にセルフサービス方式のスーパーマーケットという業態が導入されたことにより、従来の対面販売を主とした独立小売商が減少したことがうかがえる。

小売店舗総数は、その後、1970年代になって50,000の水準で推移し、1980年代に入って若干回復をみて、1987年には62,000になっているが、小売業態の主体がセルフサービス方式中心であるという状況は変わっていない。

3. 1960年代の小売店舗数減少の背景

こうした1960年代の小売店舗数減少については、セルフサービス方式、郊外立地の大型小売店舗、包装技術、物流センター等の流通上の技術革新や、都市部への人口の集中、女性の社会進出、モータリゼーションの進展などの一般的要因に加えて、以下にあげるようなスウェーデン特有の要因を検討する必要がある。

その第1は、経済成長のテンポが緩やかであっ

たこと。スウェーデンにおける年間実質GDP成長率は1965年～69年で3.8%、1970年～79年1.1%となっており、先進工業国の中でも必ずしも高い水準とはいえない。1960年代には、経済成長のテンポがこのように緩やかであっただけに、消費需要の伸びも自ずと小さかったことが考えられる。従って、ICAやKFという組織が、大量の資本を投下して流通合理化を達成し、卸・小売段階でのシェアを獲得していったのとは対称的に、資本力の乏しい既存の独立小売商には、分配到預かるパイが存在しなかったという状況が想定できる。

第2の要因は、独立小売商の所得が被用者のそれよりも低いという現実。1985年の時点では、独立小売商店主の平均年収75,000クローナに対し、被用者は93,000クローナという記録がある。つまり、スウェーデンにおいては、独立小売商は必ずしも割のあう職業ではなくて、強力な競争相手のために経営不振若しくは経営の危機に陥ったとしても、商店主の事業に対する執着心は強くないことが考えられる。この傾向は現在でも同じであり、現地での聞き取り調査では、極端な場合、新規に独立小売商を開業するのは、近年増加してきている海外からの移民だけであるとの意見も聞かれる。

第3の要因は、充実した社会保障制度。周知のとおり、スウェーデンでは高福祉、高負担の原則の下に、数多くの社会保障、社会福祉制度が充実しており、独立小売商が競争相手の店舗のために廃業を余儀なくされ、失業の状態に陥っても、一定の生活は保障されている。前項第2の要因と同様、独立小売業者の経営に対する危機感、事業に対する執着心は、わが国等とでは比較にならないほど低いと考えられる。

第4は、消費者嗜好の平板さ。スウェーデンの消費者嗜好は、わが国と比較した場合かなり平板的であるといえるし、食品以外でも、例えば、KFの経営するデパートメントストアの品揃え品目数は最大でも70,000品目程度であり、わが国の大手スーパーマーケットチェーンの店舗と比較しても極端に少ない。このため、製品差別化の程度は低く、独立小売商が品揃えの差別化を通じて新業態の店舗に対抗するという条件が育ちにくかった。

4. 流通合理化の影響

長期にわたる食品流通の合理化は、近年、流通の末端に位置する消費者に直接の影響を及ぼし始めており、具体的には以下の3点をあげることが

できる。

1) 品質水準の低い生鮮食料品

食品についていえば、生鮮食料品、特に青果物の小売店舗店頭での品質水準がかなり低い。時には、イチゴのコンシューマーパックの約半分が品質劣化のために食用に適さないというケースもある。スウェーデンは生鮮食料品の普及が増大したのはごく最近とされており、それだけに生鮮食料品の取扱いに不慣れであるということもできる。また、消費者嗜好の点では、安全、健康に対する意識は過敏といえる程に強く、店頭での青果物の品質劣化はむしろ無農薬、無公害の証のように認識しがちな傾向のあることも事実である。

しかしながら、真の原因は、組織化、統合化された産地の形態、あるいは、食品生産段階にあると考えられる。前述したように、スウェーデンの単位農協は主要品目による専門化が進行し、品目ごとに組織された連合会も地区別ブロック化されている傾向が強く、特定の産地で特定の品目が生産され、他の産地との産地間競争というものが存在しない。このため、生産者は生産物の出荷に際して選別規格は、長年の慣習に従うだけの不十分なものとなり、輸送途中での品質劣化も免れない状況となっている。

2) 食品卸・小売段階での均衡の崩壊—KFの低迷

流通合理化がもたらした弊害の第2は、KFの低迷による食品卸・小売段階での均衡の崩壊である。従来、この段階では、KF、ICA等主要流通主体の勢力が拮抗していたが近年、KFの凋落によりICAが台頭してきたことで、このバランスが崩れてきている。

KF低迷の要因としては、取扱商品のイメージの失墜、業態革新の失敗、組織の肥大化・硬直化、ライバル組織としてのICAの台頭などが考えられる。従来は地方で小型のコンビニエンスチェーンを展開していたICAは、長時間営業、品揃えの洗練、充実、サービスレベルの向上等によって成長してきたのである。とくに、KFの店舗従業員は単位生協の一職員であるのに対して、ICA店舗の責任者はその店舗のオーナーとしての独立小売商であり、店舗の収益は直接独立小売商の収入につながるため、モラルには格段の差があるとされている。

3) 主要流通主体相互の価格調整機能の低下

従来、スウェーデンの食品流通では、主要な流

通主体の一つが自己のマーケットシェアを背景にある商品について独占的な価格を設定しようとした場合、他の流通主体（伝統的にはKFであることが多い）が、自己生産等によってこれに対抗し価格の上昇を抑えるというような、主要流通主体相互の一種の価格調整機能が働いていた。ところが最近、上述のようなKFの低迷が原因となって、食品加工、食品卸・小売の各段階でそのような力

関係が崩れ始めてきている。

食品加工段階では、KFは業績の不振から傘下の製造業企業の多くを売却する傾向にあり、かわってLRFが勢力を増してきている。これはLRFが食品の生産と加工という双方の分野で主導的な立場になることを意味しており、このことから主要流通主体相互の価格調整機能低下を懸念する声が強まりつつある。

百年前の日本

—「ガデリウス百年史」より抜粋—

Import business 100year's ago in Japan

(Extract from GADELIUS 100year's history book)

ガデリウス株式会社社長室本部長 長谷川 篤 志

1889年、クヌート・ガデリウスは、悪性のパラチフスの治療のため、スマトラのゴム園からヨーロッパの家へ帰るのを余儀なくされた。

ヨーロッパに戻って元気になったクヌートはプレーメンの大きな煙草会社から、セールスマンにならないかと誘われたが断った。それより大きな計画があったからだ。1890年5月23日、彼はヨーテボリーのドロットニング通りにクヌート・ガデリウス商会を作った。目標は再び東洋であった。

量が少ないにしても、いくつかのスウェーデン企業の製品が、かの地で売られてはいるが、スウェーデンの商社はまだないことを、彼は知っていた。スウェーデンの製品を時たま扱うドイツやイギリス、あるいはオランダの商社は、当然のことながら自国の製品を優先していた。

クヌートはこれを変えたいと思った。スウェーデンの産業に精通した者が東洋の各地で、それぞれの文化、習慣、ニーズ、言葉を学んだなら、スウェーデンの輸出産業にはとてつもない可能性が開かれるはずだ、と考えたのである。

自分自身でこれらの知識を深めるための奨励金を、彼は国と輸出協会から得ることが出来た。この奨励金は、ウッデホルム、LMエリクソン、カトリネホルム製材所、歯磨のレンハルツソン社など、各分野の企業の援助で支給されるものだった。

1896年開拓者クヌートの旅は、セイロン、シンガポール、ペナン、スマトラ、中国、そして日本を目的地とした。当然それは港から港へのただ快適な船旅だけではなかった。31歳のスウェーデン人は幾度となく徒歩で、あるいは車で原野や密林を昼夜を分かたず行進しなければならなかった。しかしこれで、現地の人々がどのような食生活をし、どういった資源を持っているか、また彼らの生き方や人生観など、将来大きな意味を持つ事があることを知る事が出来たのだ。

このような近代化の例を彼は日本で見たが、賞讃に値するものだった。日本に憲法が制定されて七年しか経っていないし、外国との通商のため鎖国を解いたのは、わずか30年前のことである。にもかかわらず、鉄道網は広がり、郵便・電信も完全に機能していた。木綿の紡糸機械とマッチ工場は、われらの産業大使クヌートに強い印象を与え、大阪は既に日本のマンチェスターと呼ばれるまでに発展していた。ここでもクヌートは、品質の高いスウェーデンの鉄の明るい未来を見た。

だが何事も初めからうまくは行かない。

創立者クヌート・ガデリウスの、日本での最初の協力者が、客の前でルックスのランプのデモンストレーションをした時、電球がはずれ、粉々に割れてしまった。これを聞いてクヌートは、当然いまいましく思った。だがそれよりも彼が驚いたのは、浮田勤が事故の報告を嬉しそうに、時に笑い声を交えてしたことだった。

アジアでの冒険の最も初期の逆境時代について、既に前世紀の終りにクヌートはヨーテボリーの家族に書き送っている。

「この旅行で、私は相当落ち込んでいる。それぞれの製品分野で、まだ何の成果も上がらない。しかし、だからこそ今ここを逃げ出すのは賢明でないと考えている。日本では何かを急いでやろうとするのは無理なのだ。こちらがしびれを切らそうものなら、日本人は嘲笑して、なおも時間を稼ごうとする。何か新しいものを持ち込むのは、特に難しい」

「日本に最初の一步を踏み込んだ時から、私は居心地の悪さと、不安な焦りを感じている。顧客訪問はいつも半日がかりだ。産業施設は市街をはずれたあちこちに点在しており、そこへは人力車に何時間も乗って行かねばならない。

滞在2ヶ月で、今私は日本を去ろうとしている。そして二度とここへ来なくてもいいように、心から願うものだ」

しかし、そのクヌートが、再び来日することになる。彼の性格として、成功への見通しが途絶える前に戦場を逃げ出すことは出来なかったのだ。

やがて、落ち込んだ気分も、日本人の人間的な特質への賞讃と、日本の文化への愛着の中で、薄れて行った。例えば、粉々になったルックスのランプの件を、浮田が嬉しそうに報告したことも、激しい心の動揺を、そういう形で表現したのだと、理解出来るようになった。そして地理的に遠く、背景となる文化が異なるにもかかわらず、スウェーデン人と日本人には、驚くほど共通点が多いことにも彼は気付いた。

日本人の数百年にわたる鎖国と、ヨーロッパの北のはずれというスウェーデンの地理的条件は、両方の民族を引っ込み思案で無口にした。個人的な付き合いが深まるには時間がかかり、話が弾むようにするためには、しばしば一服のお茶や、時にはさらに強い飲物が必要となる。

目新しい物は好奇心と同時に、猜疑心を呼び起こす。だから受け入れる前に十分調べ、試してみなければ気がすまない。

それに何代にもわたって、両民族は意識的に、自分の感情を抑えるようにしつけられて来た。それは日本では面目を失わないためであり、スウェーデンでは自分を道化にしないためと言う。

こうした特性は、他の文化圏から予備知識なしで来た人々には少し理解しにくいかもしれないが、また別の共通点を引き出すことになる。すなわち、一度日本人と、あるいはスウェーデン人と信頼関係を築けたなら、それは一生持続すると考えてよい、ということだ。このことは、個人的な付き合いにも、ビジネスの付き合いにも当てはまる。

クヌートはこれらのことをいち早く学んだために、東洋に他に比類ないスウェーデンの先駆的事業の基礎を築くことが出来た。

その点で当時と現在が結びつくのだ。

なぜなら現在日本でも東南アジアでも、ガデリウスは、粘り強さ、品質、信頼、調和という昔ながらの理念の上に成り立っているからである。もともと、15ケースのリキュール、従業員僅か6人のたった一つのオフィス、そして初年度の年間売上げ35,000クローナから始まった事業は従業員2,400人、16のオフィス、年間売上げ35億クローナへと、拡大して来たが。

21世紀を前にしたガデリウスの将来も、クヌート・ガデリウスがスカンジナビアとアジアの間を、6週間から8週間かけて「冒険旅行」をした頃と同じくらい、思えば胸踊るものだ。月に何度もジェット機で、日々小さくなって行く世界を駆け巡っている現社長ヨラン・ホルムクヴィストは、極東が既に1990年代にはヨーロッパやアメリカに匹敵する発展を遂げるものと見ている。だから彼が2000年には開かれた中国、さらにはインドへ進出することを考えているとしても驚くにはあたらないだろう。そこには計り知れない資源があるのだ。

だが、会社の歴史が始まったのは本当は1904年のシンガポールではない。ヨーテボリーに親会社が設立された1890年でもない。クヌートが22歳の時、スマトラのドイツ人経営のゴム園で働いていた1880年代でもない。彼が「アジア人は厳しさだけでなく、信頼をもって遇さなければならない」と知ったその頃に始まったのではないだろうか。

平成2年度研究月報目次一覧

- No.1 新年の御挨拶……………西村光夫
新「瑞暉亭」の贈呈式……………小野寺百合子
ストレンディングとシル……………石井新太郎
(研究会報告) 川野秀之(オンブズマン制度)
研究所の活動メモ(平成元年)
- No.2 新しいスウェーデン消費生活協同組合
の店舗……………内藤英憲
エネルギー問題:スウェーデンの取り組み
……………小沢徳太郎
冬のセムラ……………藤井ユリ子
(統計) 数字で見るスウェーデン (No.4)
- No.3 世界のターゲット:スウェーデン
……………岡野加穂留
1990/91年度予算案について……………松下正三
- No.4 内閣危機とカールソン政権……………岡沢憲芙
(遺稿) ストックホルム王宮
……………(故小野寺信氏)
〈STOCKHOLM通信〉
銀行ストと経済危機……………三瓶恵子
7ヶ月目に入ったヨーテボリ滞在
……………國本雅也
(統計) 数字で見るスウェーデン (No.5)
- No.5 スウェーデン論の要注意点……………庭田範秋
思考法のスウェーデン的と日本的
……………坂田 仁
〈STOCKHOLM通信〉
私企業化が進む福祉制度……………三瓶恵子
(統計) 数字で見るスウェーデン (No.6)
- No.6 北欧の対ソ対独三角関係……………武田龍夫
老人ホーム現場の若者達
……………グンナーソン浩江
(統計) 数字で見るスウェーデン (No.7)
- No.7.8 左共産党が党名を「左党」に変更:「共産
主義」の名をハズす……………岡沢憲芙
二つの福祉 スウェーデンと日本—どこが
違うか……………潮見憲三郎
(講演会レジメ)
未来社会からのメッセージへ
スウェーデンの福祉・税制・産業・経済
(講師) 岡沢憲芙
- No.9 スウェーデン:最近の経済運営
……………宇野 裕
バルト三国とスウェーデン
……………小野寺百合子
(統計) 数字で見るスウェーデン (No.8)
- No.10 オーストラリアから見たスウェーデン
……………中嶋 博
スウェーデンにおける幼児保育政策
……………荒井 洸
新「瑞暉亭」の落成……………磯野悦子
(統計) 数字で見るスウェーデン (No.9)
- No.11 スウェーデンの政治制度の日本に与えた影響
—川崎市民オンブズマンの
制度の導入に当って—
……………川野秀之
優しい社会にも心病める人々の存在
……………福本一朗
(統計) 数字で見るスウェーデン (No.10)
- No.12 90年代の政治環境……………岡沢憲芙
スウェーデンの食品流通……………内藤英憲
百年前の日本(ガデリウス百年史抜粋)
……………長谷川篤志
平成2年度研究月報目次一覧

事務室移転のお知らせ

丸ビル当局の要望にて、スウェーデン社会研究所の事務室が、12月12日に現在と同じ丸ビルの六階617号室に移転いたしましたのでお知らせします。(電話番号は変更ありません、但し、(03) 212-1447はFAX専用の番号となりました。)